令和４年度　第 39 回全国高等学校体操競技選抜大会（三重県）

男子体操競技審判員報告

審判長　髙橋　孝徳

第 39 回全国高等学校体操競技選抜大会が三重県四日市市で開催されました。

2020 年初頭から世界中で猛威を振るった新型コロナウイルスも様々な対策により、徐々に平穏の生活に近づいていることを感じられる様になってきました。それでもいまだ感染拡大の発生が懸念されるなかでの“高校選抜”開催にあたり、高体連や三重県体操協会関係者、地元の方々の多くの力添えにより、無事に実施できましたことを心より感謝申し上げます。

今回出場した高校１年、２年生はコロナにより制限が敷かれたのが中学１年、２年生の時ですので、体操競技に出会い本格的に取り組み、技ができる楽しさと喜びを堪能する時季を歯痒い思いで過ごした世代であると推察いたします。

今回、演技を見ていて感じました最初の印象は、本来、この年代で得るべき基礎的な体力の不足、基本となる技の技術不良、幾度となく反復練習を行うことにより無意識でも実施できるまで刷り込まれるべき捌きの不安定さが多く見られたことでした。

これまでの状況下で仕方のない部分もありましたが、これを悔いるよりここからどのように練習に取り組むか、情熱と創意工夫とで、取り戻していただきたいと願っております。

競技前日での審判会議、監督会議では以下の２点を通達致しました。

① 適用規則・・・2022 年版採点規則および男子体操競技情報 30 号までを適用

② 採点実務について・・・その年度で意識すべき規則や採点指針について

今回は 2022 年版採点規則を採用し１年が経過しましたが、その後、国際体操連盟（FIG）よりいくつかの通達がありました。これらは男子体操競技情報 30 号に記載してあります。

監督会議では規則上の不明な点は競技前までに解決して試合に臨んでいただく様にお願いをいたしました。

しかしながら、規則や新しい通達を把握していれば減点を科せられることなく回避できる項目にも抵触している実施が散見されました。この点については審判本部からの通達の仕方、情報提供の方法を見直す必要があるかもしれません。指導者の方々には、毎年冬の時季に通達される情報を必ず確認していただく様お願いしたいと存じます。

今回、総合得点では 80 点に届かない結果でありました。情報 30 号に記載されているとおり技の認定や評価基準がより具体的・明確化になったなか、苦慮している演技が散見されました。

その様な中でも素晴らしい技捌き、つま先まで意識された姿勢、雄大な実地、見事な着地をみせた終末技など目の見張る実施があったことは、この先に花開くことを期待できる光明を見出すことが出来ました。

体操競技が進化、高度化していく中で、演技を安定させるためには基礎の構築、質の高い基本技の習得が必須です。今までの制限された時間を取り戻すため、様々な技にチャレンジしていく事かと思いますが、同時に基本部分の確認、習熟度を高めることにも忘れずに取り組んでいただきます様お願いいたします。

以下、種目ごとに採点上の判定基準、意識して欲しい項目などがまとめられています。選手、指導者の皆さまには熟読していただき、今後の競技会への指標にしていただければと思います。

《ゆ　か》

D1/E1　花北　圭

## １．採点上の打ち合わせ事項

〇2022 年版採点規則の確認

・種目特有の評価ポイントの確認

① 雄大なアクロバット的跳躍技の先取りのある安定した着地を評価する。

② 宙返りひねり技でのゆがみのない正確な実施を評価する。

③ グループⅠの旋回技や力静止技、柔軟技において丁寧で美しさを表現する捌きを評価する。

④ コレオグラフ的な動きを意識し、リズミカルにフロアエリア全面を使用した演技を求める。

・技の認定、実施に際してはルールに則り厳密に採点する。

・ニュートラルディダクションの確認。

## ２．採点上起こった事項とその処理

・組合せにおいて、2 つ目の技において大過失を伴った実施には加点を与えなかった。（3 件）

・前方伸身宙返りで腰がまがり、明確な伸身局面が見られない実施は屈身（A 難度）と判定し、組合せ加点を与えなかった。(2 件)

・静止が求められている技において、静止が見られない実施は不認定とした。（2 件）

・開脚座から伸腕屈身開脚力倒立において、停滞が見られた実施は立位から伸腕屈身開脚力倒立と判定した。（1 件）

## ３．その他特記事項・意見・感想等

58 演技中 D スコアの最高は 5.8 点が 1 演技（昨年度：5.8 点が 3 演技）、組合せ加点を伴う構成の実施は 34 演技（昨年度：32 演技）、そのうち 2 回宙返りを含む実施が 2 演技（昨年度：5 演技）、2 種類の組み合わせを含む実施が 4 演技（昨年度：4 演技）、3 種類の組み合わせを含む実施が 1 演技（昨年度：0 演技）であった。また、大欠点や大過失を伴う減点により 5 演技（昨年度：4 演技）に加点が与えられなかった。2 回宙返り技においては、実施なしが 3 演技（昨年度：3 演技）、D 難度以上を 2 種類実施したのは 5 演技（昨年度：4 演技）であった。

E スコアの最高点（8.50 点）を出した選手は、技の正確性や着地の安定性が素晴らしい実施であった。しかし、大会全体としては春先の大会ということもあり、演技開始から終末技まで丁寧に実施する選手は少なかった。特に、脚の開き・姿勢・ひねり不足・着地準備・着地と 1 つの宙返り技で複数の減点をされる選手や、前後（左右）開脚座（瞬時静止）における柔軟性の欠如・膝やつま先のまがっている選手が散見されたこと、および終末技の着地を止めた選手が少なかった（3 名）ことが印象に残った。

雄大な跳躍技で先取りのある安定した着地、宙返りひねり技での正確な実施、グループⅠでの丁寧で美しさを表現する捌きなどは種目の評価ポイントにもなっている。これらのポイントが演技の中で表現することができれば、D スコアと E スコアのアップに繋がる。

4 月以降の大会に向けて、技術の向上と美しい実施を目指して練習に励んでいただき、成果が発揮できることを期待する。

《あん馬》

D1/E1　森　直樹

## １．採点上の打ち合わせ事項

・2022 年版採点規則および体操競技情報 30 号の確認（技の認定と減点項目について）
・腰の位置が高く、雄大かつスピード感のある旋回を評価する。
・倒立を経過する技では、停滞や力の使用がなくスムーズに倒立に持ち込む捌きを評価する。
・演技全体を通して、安定感のある実施を評価する。

## ２．採点上起こった事項とその処理

■技の認定について

・交差倒立技において腰が深くまがった実施は不認定とした。
・交差横移動技において、脚部が馬体に乗る実施は不認定とした。
・グループⅡ/Ⅲの技において、次の技に続けずに落下したものは不認定とした。
（少なくとも半周旋回後の明確な背面支持がみられれば認定。）
・フロップ/コンバイン技において途中で落下したものは、すべて不認定とした。
（途中で落下せずに次の技に続けた場合は個々のフロップ技の難度を認定した。）
・倒立下りにおいて、上げた脚が下がった実施は不認定とした。
・倒立３部分移動 270°ひねり下りにおいて、バランスを崩して途中で下りた実施は C 難度を認定した。

■E スコアについて

・縦向き３部分移動技において、角度逸脱がみられたものは一移動毎に減点をした。
・下向き転向（移動）技において、脚開きなどの姿勢不良がみられたものは一転向毎に減点をした。

## ３．その他特記事項・意見・感想等

2022 年版採点規則が適用されてから１年が経過し、FIG は早くも新しい情報を追加し、技の認定や実施に対してとてもシビアに判定する傾向となってきた（詳細は男子体操競技情報 30 号に掲載）。あん馬においては交差倒立技や交差横移動（ひねり）技の認定基準が変わってきており、それにより昨年の世界選手権では多くの選手がダメージを受けていた。今大会においても、交差技において大過失を伴い、不認定となるケースが数件あった。

落下の件数は昨年大会（59 名中、落下者 32 名で落下数 45 回）に比べて減り、今大会は 59 名中、落下者 18 名で落下数 22 回であった。落下の多かった技は例年と同様、縦向き３部分移動技であり、特にシバドでの落下（移動中の落下や終了後に次の技に続けられずに落下）が目立った。

D スコアの平均値は 4.1、E スコアの平均値は 7.18 であり、ここ数年で大きな変動はない。また、10 技で構成された演技を実施した選手は全体の 49%であり、8～9 技での演技実施をした選手がまだ多くいる印象を持った。さらに、今大会７技での演技構成で技数不足の ND（3.0）が発生したケースが４件あった。高校適用規則では７技未満で ND が発生するのに対して、一般規則では８技未満で発生するため注意が必要であると感じた。

大会全体を通して大過失は多かったものの、体をまっすぐに伸ばした姿勢でスピード感のある旋回や技捌きを実施する選手の数はここ数年で格段に増えてきている印象を持った。今後はそれらに加えて、技の正確性と安定感を高めることと D スコアアップを課題として日々のトレーニングに励んでいただきたいと強く感じた。

《つり輪》

D1/E1　梅田秀一

## １．採点上の打ち合わせ事項

・2022 年版採点規則の確認。
・力静止技における静止時間は厳密に対処する。
・ヤマワキやジョナサンで回転速度が遅い、または大きさがない場合の減点の確認。
・倒立位で腕がケーブルに触れる、肘や腰を使って調整などの減点について。
・各々の演技は、理想とする完璧な演技を基準に評価される。

## ２．採点上起こった事項とその処理

・後ろ振り上がり十字懸垂やけ上がり十字懸垂、またホンマ十字懸垂で持ち込む際に 45°を超えた角度の逸脱があった場合は不認定とし、その後の十字懸垂が要件を満たした場合は十字懸垂（ⅡＢ）のみ認定した。
・ホンマ脚前挙支持において、支持局面で腕が 90°を超えてまがった場合は不認定とし、脚前挙（ⅡＡ）のみ認定した。
・後ろ振り上がり開脚水平支持において、45°を超えた腰のまがりがあった場合は不認定とした。
・後ろ振り上がり中水平支持において、肩が輪の上部を超えて持ち込まれた場合には、後ろ振り上がり水平支持（ⅢＤ）として認定した。
・ほん転逆上がり十字倒立で持ち込み及び静止姿勢において 45°を超えた角度の逸脱があった場合は不認定とした。
・後方車輪倒立（2 秒）において、脚が 90°を超えて下がった実施は不認定とした。
・伸腕伸身逆上がり十字懸垂において極端に振動を使った捌きは後方け上がり十字懸垂（ⅢＣ）として認定した。

## ３．その他特記事項・意見・感想等

力静止技や倒立においての静止時間や、姿勢を厳密に対処するように説明をした。また伸腕屈身力倒立をはじめとする倒立を伴う技でのケーブルへのタッチや寄り掛かりについてもルール通りに採点へ反映することを申し合わせた。

Ｄスコアの最高は 5.２点（昨年度：5.6 点）、平均は 4.19 点（昨年度：4.18 点）であった。グループⅡおよびⅢの高難度技にチャレンジする姿も多く見られた。残念ながら今大会では不認定となってしまった実施もあったが、技を抜くことを選択せずに、更に精度をあげて可能な限り高いＤスコアで夏の競技会に望むことを期待したい。

Ｅスコアの最高点（8.30 点）を出した選手は、力倒立や振動倒立においてケーブルに触れるような実施が少なく、常に輪が開かれた状態で演技実施をしており、その部分が評価された得点となった。また、今回着地が止まった演技が８演技だったが、着地の出来不出来は将来的にも必ずＥスコアに反映されるので、常に止める意識で望んで欲しい。

この種目は、いかに正しい姿勢で、求められた静止時間を満たす事が出来るかが大きく評価の分かれるポイントとなる。力倒立ひとつにおいても、キメが曖昧なまま輪の揺れに合わせて次の技へ移ってしまうと静止時間不足または全く静止がないといった減点が伴ってしまう。選手・指導者としっかり連携をしながら、より高い難度の技を正確に実施できるように期待する。

≪跳　馬≫

D1/E1　伊東　貴志

## １．採点上打ち合わせた事項

・2022 年版採点規則および体操競技情報 30 号の確認
　＊第１局面での足の開きに対する減点
　＊美しさ・雄大性を表現した演技実施
　＊ひねり不足や空中姿勢の腰まがりや膝まがりの実施について
　＊着地前の先取りが行われているかどうか
　＊意識的に着地を止めた実施かどうかの見極め
　＊腰高な着地や腰の位置が低い着地の評価について
　＊競技直前練習でのウォーミングアップの本数についての確認

## ２．採点上起こった事項とその処理

・雄大で高さのある跳越技を評価した。
・ひねり不足や着地準備等は厳密に採点した。
・伸身姿勢での跳越技において、腰をまげた屈身姿勢や膝まがりは相応の減点を行い伸身姿勢の跳越技として判定した。

## ３．その他特記事項・意見・感想等

コロナ禍の影響がまだ影響しているのか、E スコアは実施に余裕が無く、伸び悩んだ印象を受けた。D スコアの最高点は 5.6、E スコアの最高点は 9.20 であった。

その中で、優勝と２位のドリッグスの実施は、姿勢こそ減点される部分はあったが着地までしっかり止めて非常に完成度の高いものであった。３位には今大会唯一のロペスの実施があった。着地が乱れ、ラインオーバーがあったため得点を伸ばせなかったが今大会一番の雄大で高さのある跳越であった。高校生の段階から大きな試合で着地を決めていけること、雄大で高さのある跳越ができることは今後の選手生活にかなりの自信がつくことになるであろう。

今後も夏の大会に向け、D スコアの高い跳越技、踏切から着地までの課題克服に努め、雄大で高さがあり余裕を持って着地に持ち込める演技を期待したい。

■実施された技の分布（59 名）

| グループ | 跳越技名 | 価値点 | 人数 | % |
|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | ロペス | 5.6 | 1 | 2 |
| | ドリッグス | 5.2 | 10 | 17 |
| | アカピアン | 4.8 | 30 | 51 |
| | 伸身カサマツひねり | 4.4 | 4 | 7 |
| Ⅱ | 前転とび前方伸身宙返りひねり | 4.0 | 1 | 2 |
| Ⅲ | 伸身カサマツ | 4.0 | 8 | 14 |
| | 伸身ツカハラ | 3.2 | 2 | 3 |
| Ⅳ | 伸身ユルチェンコ 2 回ひねり | 4.8 | 1 | 2 |
| | 伸身ユルチェンコ 3/2 回ひねり | 4.4 | 1 | 2 |
| | 伸身ユルチェンコ 1 回ひねり | 4.0 | 1 | 2 |

≪平行棒≫

D1/E1　三富　洋昭

**1．採点上打ち合わせた事項**

採点規則・競技規則について

・2022 年版採点規則・男子体操競技情報 30 号の確認

・ウォーミングアップは各選手に対し 50 秒が与えられ、口頭によりコールをして伝える。

・ウォーミングアップ後に、第１演技者に対して最大で１分間の器械準備の時間を与える。

D スコアについて

・静止技において静止がみられない実施は不認定とする。

・実施された技がコントロールされずに（器械上に）落下したものは不認定とする。

・後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持やヒーリーの支持局面で大きく肘がまがる実施は不認定とする。

・棒下宙返り（ひねり）倒立で、倒立位から 45°を超え逸脱した実施は不認定とする。

E スコアについて

・雄大で美しい実施であり、一つひとつの技のきめがしっかりなされ、安定した演技の評価。

・前振り上がりやけ上がり、モイの後半部分では大きさを求め、支持の際に腰が下がるものは減点の対象とする。

・終末局面が倒立位の技においての角度逸脱による減点は厳密に行う。

・後ろ振り倒立は振動を有効に使い、伸身姿勢を保って倒立まで持ち込まなければならない。後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持やヒーリーで支持後に力を使ったり、腰をまげたりして倒立に持ち込むものは減点の対象となる。

・静止技における静止時間については厳密に判定する。静止時間が短い、または静止がみられない実施は相応の減点の対象となる。

・バブサー、モイ、ティッペルトの振り下ろす際の膝の割れや懸垂時の膝の緩みなどの減点は厳密に行う。

・手のずらしや動きは厳密に採点を行う。

・「マクーツ」の単棒倒立部分の停滞や停止の確認。

・前振り上がりの背中の水平位と水平位からの逸脱に対する減点の確認。

**2．採点上起こった事項とその処理**

・「ヒーリー」で大きく肘のまがった実施は不認定とした。

・「ティッペルト」において、脚部がバー上にのったものは器械上の落下とし、不認定とした。

・「ディアミドフ」において、倒立でコントロールできずに落下したものは不認定とした。

・前振りひねり倒立において倒立位から 45°を超えて逸脱した実施は不認定とした。

・静止を求められる技においては静止時間の不足について厳密に採点した。

**3．その他特記事項・意見・感想等**

D スコアの最高 5.7、平均 4.3、E スコアの最高 8.55、平均 7.53 であった。着地の止められた演技は 4 演技あった（後方屈身 2 回宙返り下り 2、かかえ込み 2）。不完全な実施で不認定となった技は、17 技あった（ティッペルト 8、棒下宙返り倒立 3、ディアミドフ 2、ヒーリー1、前振りひねり倒立 1、後方車輪 1、モイ 1）。演技途中の落下（器械上の落下含め）や終末技の大過失が多く見られた。一つひとつの技のきめがまだ不十分で、手のうごかしやずらしも散見され、全体的に不安定感が目立った。まだシーズンの前の最初の大会でこれからの演技の仕上げの途中であることで今後においても怪我には十分気をつけて練習を重ね、インターハイに向け、D スコアを高めた演技を実施すべく、課題の克服に努め、一つひとつの技にきめの感じられる演技に仕上げていってほしいと思う。雄大かつ美しい演技を期待したい。

《鉄　棒》

D1/E1　佐々木　彰文

## １．採点上の打ち合わせ事項

・2022 年版採点規則の確認。

＊ 安定した演技実施を基盤に、高められた D スコアを有する演技を評価する。

＊ 美しさ、力強さを表現した演技実施を評価する。

＊ 着地への準備局面を有し、意識的に止められる終末技を評価する。

・雄大な手放し技や正確な終末技を評価する。

・倒立位を経過する技、ひねりを伴う振動技での角度減点の少ない実施を評価する。

・その他

＊ 演技開始の振り出しにおいて３回を超えたスイングは減点

＊ 手放し技や終末技の前の車輪での膝まがりは実施減点

＊ 倒立になる、または経過する技の角度逸脱について範囲の確認

＊ 手放し技でバーを握る際の腕のまがり、身体の歪みは減点

## ２．採点上起こった事項とその処理

・ヤマワキは、上昇の仕方、腰のまがり具合、ひねりの度合いを総合的に判断した。明らかな腰のまがりが見られた場合や、表現が著しく乏しい実施はボローニン（B 難度）と判定した。

・伸身トカチェフでバーを越える前に著しい腰のまがり（45°以上）があった場合は、屈身トカチェフ（C 難度）と判定した。

・手放し技において、バーを握る前に身体の伸ばしが不十分な捌きや、バーを握る際に腕のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは実施減点とした。

・伸身姿勢での終末技において、経過の大部分で腰をまげた屈身姿勢がみられた実施は、かかえ込みと同価値と判定し C 難度とした。

## ３．その他特記事項・意見・感想等

まだ続くコロナ禍の影響か実施に余裕が無く、大過失や落下・転倒が散見された。

出場選手 58 名のなかで、D スコア 5.0 以上の選手は 5 名（前回 4 名）、最高 D スコアは 5.3（前回 5.5）であった。D 難度以上の技の出現数を昨年度と比較すると、グループⅠ（3→2）、グループⅡ（20→22）、グループⅢ（17→20）、グループⅣ（49→52）であり昨年とほぼ横ばいの出現数となった。昨年とほぼ同様な数であることから、D スコアの変化も昨年通りと捉えることができる。また、難度が上がった閉脚シュタルダーや閉脚エンドーを積極的に取り入れた演技も多数見られたが膝の緩みやバーへの脚のぶつかり、姿勢不良等多数見受けられた。

E スコアについては、最高が 8.60 で、着地が止まった実施が 10/58 名であった。その内容をみると B 難度 1 名・D 難度 5 名・E 難度が 4 名であった。また手放し技においてバーを握る際の姿勢であったりその前後での膝や肘のまがりのない実施や技の捌き方など全体的に丁寧な演技をしている印象を受けた。しかしながら全体の平均は 7.35 であり、やや苦しい演技が多かった。順手背面車輪を実施する演技も一定数あったが、後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂において、腕と上半身の開き角度が不十分な実施が非常に多く、中欠点以上の実施減点を伴う実施が殆どであった。また、単純な手ずらしや倒立位を経過する技やひねりを伴う振動技での角度等だけでなく、シュタルダーやアドラー開始時において、膝の緩みやつま先のまがりが目立つ選手が多い印象を受けた。

日本の美しい体操であるほんのわずかな意識を積み重ねこれからも美しく雄大でダイナミックな鉄棒の実施を期待したい。